

身延の實相

渡邊正教

近時文運の發展に依つて、諸種の思想が千様萬態の形式及び内容を以つて、社會の各方面に現れ來つた。是と同時に諸種の社會的運動も、各所に出沒してゐる。學としての世界も、無限なる人生の智的欲求に依つて、瞬間の止みもなく、進展の歩を進めつゝある。此間人類が直接間接に、享受しつゝある福祉と災厄とは、亦枚擧に暇なき有様である。吾人は如斯き文化の惠澤を享けて、生存を意義付けて行くのである。然し乍ら吾人は、更に一層深き考察を社會及び人類の上に、施さなければならぬ。何となれば此等の社會的思想及び運動は、悉く唯物史觀の上に立脚せる故である。吾人は物質文明の背後に、何ものか、より已上の偉大なるものを見出さなければならぬ。無論物質文明と雖も、永い歴史の中に、高遠なる思索の產物として、實に人生の慶福を創造しつゝ開展し來つたものであつて、其の恩澤や亦大なるものがある。従つて吾等は、瞬時と雖も、物的要求を離れて、生存を認容され難

きは、明白な事實である。然し吾人は是れを以て、人生の總てなりと満足する事は出来ぬ。何となれば、物質文化のみを以て人生々活の圓滿完全を期する事は不可能なるが故である。此に於てか吾人は現實としての世界に、精神文化の光明ある事を認容せねばならぬ。即ち永遠なる歴史の中に、燦爛たる光明を放つて、而も最高の價値を保有し乍ら、常に物質世界の指導原理として存在するものは、精神文化である。故に物質的社會は、精神文明の偉力に依つて、常に淨化せられ、理想化せられつゝある事に氣付かなければならぬ。精神文明も亦た多種多様の形式、及び内容を持つてゐる。即ち其の高遠なる理想を深遠なる哲學に求め、人間生活の根本要件としての倫理に求め、此れを最高理想の表現としての宗教に、求めんとするありて一様ではないが、兎に角斯る物的と心的との兩要素が、人間本來の欲求に依つて活動し、流轉し來つたものが社會史の頁を繰つたものである。

如斯き複雑多岐なる現代に於いて、吾人は何處に絶対の安住所を求むべきか、其の歸結に迷ふのである。一切の世界的民衆に、最勝の安全地帯を與ふべく、古來幾多の偉人聖徳が現れ、各自の主義主張を携へて、間斷なく、吾等に警告を與へ、覺醒を促し來つたのである。此間に在つて、吾が青史が生んだ偉人、否世界の文化史上の一異彩として、鎌倉時代を震撼せしめた聖人は、日蓮其人である。即ち彼が六十年の血涙の生涯は、實に人類愛の結晶であつた。或る時は北海の孤島佐渡の寒國に、道

義的國家の衰運を歎き、或る時は伊豆の伊東に「數々見擯出」の聖文を読み、更に龍ノ口の刑場に「我不愛身命但惜無上道」の金口の説法を体験して、末法救世の佛勅を遂げ、實に悲風慘雨席暖まる暇なき、奮闘史は悉く吾々人類に對する慶福の祈りであつた。

即ち吾等をして、純淨なる宗教的情操の試練の中に、信仰意識の力強い、而も永遠的な自覺に依つて、現實生活の中を流るゝ、眞の生命を悟らしむる爲であつた。

此の原理は、三千年來大聖釋尊に依つて顯示せられ、法花經に依つて傳へられ、聖日蓮に依つて躰顯せられたる、所謂人生其のものゝ本然の價值への自覺で有らねばならぬ。故に「法華經」は釋尊の中心思想を述べた、全人類への福音書であり、日蓮上人は法華經其のものゝ活動体として、人類の生存競争裡に、躍動せられたる躰験者である。故に釋尊の説ける永遠の眞理は、單に思索的觀念の對象ではなく、大上人に依つて證明された、宗教意識の極致である。故に吾人は、全的生活としての人類社會を、此の尊嚴なる信仰に依つて、統一し美化して行くべきである。此の聖者が畢生的事業の總結として、晩年の身延山の生活がある。

廿有餘年間、權勢の壓迫と、重疊たる迫害を廢して絶叫し續けた聖人が、一朝漂然として山間に退かれ、爾後九ヶ年間沈思默禱の生活を續けられた事に對して、吾人は深く思を致すべきである。

聖人の一代を通しての主義は、立正安國である。安國の範圍は、地理的の日本に限られたものでは勿論無い、精神文化に依つて物質的世界を淨化せんとせしものが、所謂立正安國の叫びであり、信條である。其の精神文化の根本道場として選ばれたのが身延であつた。如斯考へ來つた時、身延は獨り聖人に取つて「難忘山であり、永久棲神の山」であるばかりでなく全人類の等しく渴仰し、味ふべき聖地である。「多くの月日を送りて、讀誦し奉る法華經の功德は虚空にも餘りぬべし」と言はれ、「此の砌に臨まん輩は無始の罪障忽ちに消滅し、三業の惡轉じて三徳を成せん」とも仰せられたが、雄大崇高なる山河は自ら實相不滅の月を浮べ、山色宛然として久遠本佛の常說法教化の法音を傳へ、忠孝一本の倫理的基調を示す聖跡は道義的國家の建設を豫想し、佛凡一如の絆たる唱題の聲は萬邦平和の鍵鑰を示すものである。實に靈山一會嚴然未散の表象としての身延、穢惡充滿の現實界に精神的王國を活現すべき、最高至上の聖地として愛すべく、渴仰すべき山、形を去つて實の身延、其處に聖者の御魂は棲み、信仰の道場として、文化の中心としての尊さはある。

—— 以上 ——